

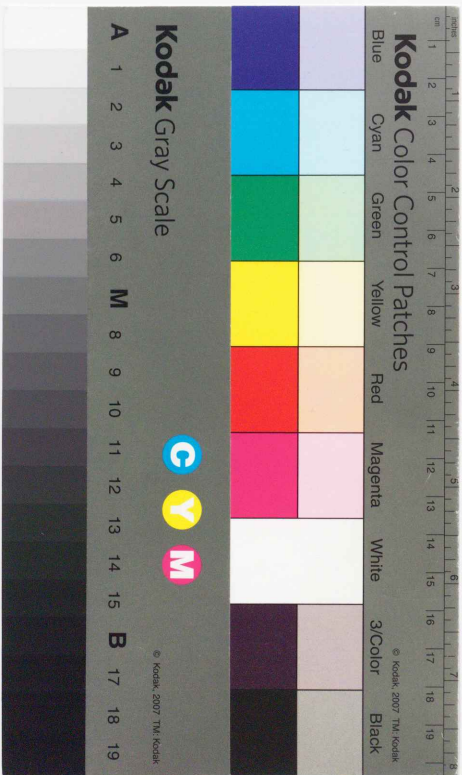
古墳時代の各務原

～ 600 基の古墳は何を語るか～

展示解説



会期 令和元年 11月23日(土)～12月26日(木) 会場 各務原市立中央図書館 3階 展示室 A
主催 各務原市教育委員会



1. 古墳の密集する各務原

各務原市内の古墳の数は、平成元年度に発行された『岐阜県遺跡地図』により、滅失したものを含めて605基とするのが公式見解です。しかし、大正から昭和の初めに美濃の遺跡を調べ歩いた郷土研究者、小川栄一の記録には、700基以上が記されています。遠い昔に削られてしまった古墳や、未発見の古墳があることを考えると、より多くの古墳が存在したと推定されます(図1)。

岐阜県内の古墳の数は、5,140基(平成28年度文化庁統計)とされますので、各務原市内には約8分の1の古墳が集中していることになります。これらの古墳は、現代の私たちに何を語ってくれるのでしょうか。

1 古墳時代とは

3世紀の半ば頃、奈良県の大和盆地では、ヤマト政権によって初めて「前方後円墳」が築造されました。その後、前方後円墳は日本列島の広域で築造されるようになることから、地方を治めていた首長達がヤマト政権と連合関係を結んでいったと考えられています。

古墳時代は、前方後円墳の造営が始まった3世紀半ばから4世紀後半までを前期、特に大型の前方後円墳が造られた4世紀末から5世紀後半までを中期、小型の群集墳が増加する5世紀末から6世紀末を古墳時代後期、そして前方後円墳が造られなくなり飛鳥時代へ向かう7世紀を終末期、と区分されています。

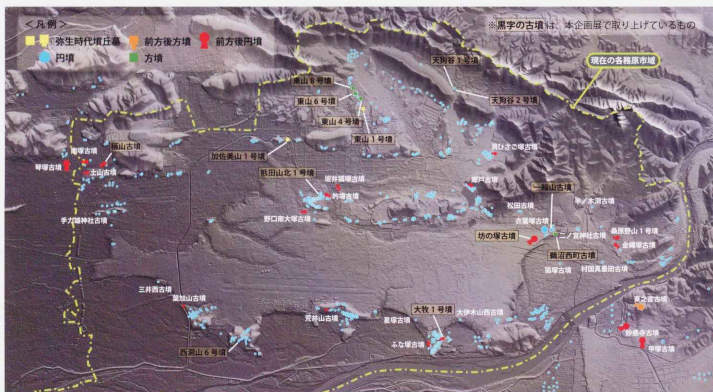


図1 各務原市域及び周辺の古墳分布図

2 古墳時代の芽生え(加佐美山1号墳/東山1号墳)

古墳は、被葬者の富と権力の象徴です。古墳の前身となる墳墓は、弥生時代に出現しました。これらは、古墳とは区別して周溝墓や墳丘墓と呼ばれます。

市内には、現在2基の墳丘墓が確認されています。1基は蘇原古市場町の加佐美山1号墳(図2)、もう1基は蘇原持田町の東山1号墳(図3)です。

加佐美山1号墳は平成元年度の調査から一辺15m以上、東山1号墳は昭和60年度の調査から一辺8.5~9.5mで、一部に台形の張り出しをもつ墳丘墓であることが分かりました。この2基は、いずれも各務原市北部の丘陵上に位置しますが、新境川が流れる田園地帯に近いことが

ら、弥生時代に水田開発に成功して富を得た有力者の墓であったと考えられます。今後、この2基以外にも流域の丘陵上に墳丘墓が発見される可能性があります。

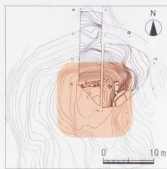


図2 加佐美山1号墳の実測図



図3 東山1号墳の実測図

2. 初期段階の古墳【一輪山古墳/柄山古墳】

現在のところ、市内では一輪山古墳が最古の古墳と位置付けられます。また、前方後円墳としては、柄山古墳が最古と考えられます。

両古墳は、古墳時代初期における各務原市域とヤマト政権の関わりを知るために、とても重要です。

1 一輪山古墳の概要

鶴沼西町1丁目、衣裳塚古墳から南東へ約50m離れた場所。地形的には各務原台地の北東縁部に所在していました。残念なことに、大正12年の開墾で滅失しています。昭和初期の記録には、直径約9mの円墳と記されていますが、これが本来の規模と形状であったかどうかは不明です。

一輪山古墳からは、開墾中に三角縁波文帯四神二獣鏡(写真1)が出土しました。他の出土品は不明ですが、この銅鏡の存在から一輪山古墳は4世紀後半に造られた、市内最古の古墳に位置付けられます。

2 三角縁波文帯四神二獣鏡

銅鏡のなかでも、古代中国の神話に登場する神仙や靈獣が表現され、縁辺部の断面が三角形に尖る鏡を三角縁波文帯鏡(同范鏡)といひ、全国の古墳から500面以上が出土しています。一輪山古墳から出土した銅鏡は、神仏4体と靈獣2体を配置し、その周囲に波文を巡らせることから、三角縁波文帯四神二獣鏡と呼ばれています。

三角縁波文帯鏡は青銅製の鎊物です。同じ鑄型から造った鏡(同范鏡)が存在します。一輪山古墳の同范鏡は、島根県松江市新庄町の八日山1号墳から出土しています(写真2)。このように、同范鏡が別々の古墳から出土した事例は多く確認されています。一説によれば、ヤマト政権が銅鏡を管理し、各地方の首長へ贈与したためとされ、その行為は同盟や主従関係を意味すると考えられています。三角縁波文帯四神二獣鏡の同范鏡が出土した島根県と岐阜県の地理関係から、銅鏡がヤマト政権から東西の首長へ分配、贈与されたことが窺えます(図4)。



図4 八日山1号墳と一輪山古墳の位置

3 柄山古墳の概要

那加柄山町の丘陵、柄山(標高38.7m)の山頂に造られた墳長82mの前方後円墳です。柄山という名称は、「柄が付いたような形の山」という意味があり、古墳の存在に由来するのかもしれませんが(写真3)。現状では、山裾の全周は大きく削り取られ、古墳が位置する頂部のみが残されています。

4 鶏頭埴輪

柄山の削平工事中に、古墳の近くから見つかったという鶏頭埴輪の頭部破片が伝えられています(写真4)。高さは11.6cmで、鶏冠や肉ひげなど、雄の特徴がよく表現されています。

表面は赤く塗られた痕がみられます。当時、赤色は神聖視されていたので、鶏頭埴輪は古墳を守る重要な役割を担っていたのかもかもしれません。

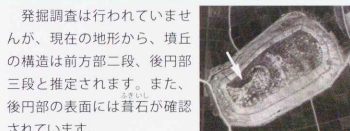


写真3 柄山古墳(昭和23年)



写真4 鶏頭埴輪(左・正面・右)

3. 地方最大級の前方後円墳【坊の塚古墳】

4世紀後半以降、全国に大型の前方後円墳が出現します。各務原市域では、台地上の目立つ場所に墳長120mの「坊の塚古墳」が築造され、近隣では愛知県山守市の「青塚古墳」や岐阜市の「琴塚古墳」など、同規模の前方後円墳が築造されました。

1 坊の塚古墳の概要

鶏沼羽場町に所在する前方後円墳です。出土遺物などより、4世紀末から5世紀初頭に築造されたと考えられます。墳長120mという規模は、岐阜県では大垣市の麻飯大塚古墳に次ぐ第2位の大きさです。また、中部地方では第10位、全国では第140位に位置付けられます。大型の前方後円墳が集中する近畿地方を除けば、地方では極めて立派な古墳といえます。平成27年度から令和元年度までの発掘調査によって詳細が明らかになりました。

2 墳丘と周壕

墳丘は、周りの土を掘り中央へ盛り上げることで造られます。そのため墳丘の周囲には窪地ができ、その形を整えたものが周壕です(図5)。現在は道路や畑、宅地になっていますが、墳丘の周りに周壕が埋没していることを、平成4年度の発掘調査で初めて確認しました。

3 葺石と築成段

墳丘の傾斜面は、小型の山石で覆われています。これを葺石といい、墳丘の崩壊を防ぐための補強と、外観を美しく目立たせる目的を兼ね備えていました。また、葺石の最下部は基底石と呼ばれる一回り大きな石で支えられています(写真5)。

墳丘は、前方部・後円部とも、削り出しによる下段、盛土による中段・上段の三段築成です。各段の間には、幅2m以上の平坦面(小段)が巡り、傾斜面が一気に地滑りしないよう工夫されています(写真6)。



写真5 くびれ部の葺石と基底石

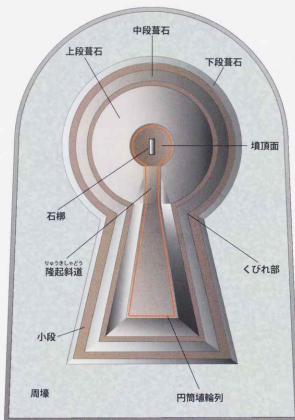


図5 坊の塚古墳復元モデル



写真6 前方部の三段築成を示す葺石と小段

4 円筒埴輪

前方部・後円部とも、墳頂面の外周には円筒埴輪が1列に並んで掘え付けられています(写真7)。円筒埴輪とは、人や動物の形ではなく土管のような形で、側面に透かし穴や、帯が付けられたものです(写真8)。これらの埴輪は僅かな間隔で並べられており、計算上では約380個が古墳の頂上に立っていたことになります。

後円部では、壺形など特殊な形をした埴輪の破片が見つかることから、内側にこれらの埴輪が配置されていた可能性があります。また、赤く塗られた埴輪も見ついています。埴輪は、古墳の内と外の世界を隔てる役割を果たしていたとも考えられています。

5 埋葬施設

遺体が葬られた施設は、後円部の中央に埋設された石柙(竪穴式石室)です。その内部には、割竹形の木棺が安置されていたと推定されます。残念ながら、石柙は過去の盗掘で大きく破壊され、副葬品は持ち出されていました。

発掘調査では、石柙の壁に積み上げられていた多量の割石が、散らばった状態で見つかりました。また、石柙の天井に乗っていた巨大な蓋石(最大のもは長辺2.8m、短辺1.38m、厚さ20cm、推定重量2.5~3t)が5枚、元の位置から動かされた状態で見つかりました(写真9)。蓋石が、実際に5枚だったとすれば、石柙の規模は長辺が5m以下、短辺が1m以下(いずれも内寸)と推定されます。一部の割石には、小口面に赤彩が認められることから、石柙の内面は赤く塗られていたことが分かります。

6 副葬品と墳頂祭祀

鉄製品の一部も出土しましたが、最も多かったのは滑石製模造品です(写真10)。斧形が1点、刀子形が2点、勾玉が65点、管玉が74点、瓊玉が1点、白玉が896点です。これらは石柙の内部にあったか、もしくは墳頂面に撒かれていた可能性があります。

また、墳頂面では葬送儀礼の供物として置かれた、食物形土製品(魚形・餅形・アケビ形)、土師器(甕形・高杯・小型丸底壺)が出土しています(写真11)。



写真7 円筒埴輪列の検出状況



写真8 復元した円筒埴輪



写真9 盗掘によって破壊された石柙(真上から)



写真10 滑石製模造品



写真11 食物形土製品と土師器

4. 群集墳のはじまり【熊田山北1号墳】

5世紀末、蘇原地域に突如として異質の古墳が出現します。丸い形をした直径11~17mの円墳で、複数が密接する群集墳です。埋葬施設や墳丘に、石を一切使わないことが特徴で、木製の棺を、墳丘へ直に埋設（木棺直葬）していました。

① 熊田山北1号墳の概要

熊田山北古墳群は、微高地上に築造された13基の円墳が確認されています(図6)。平成9~10年度に、道路建設に伴い1~8号墳が発掘調査されました。多くは削平されており、現在は津島神社の境内に3基が残るのみです。

1号墳は、同古墳群のなかで最大と思われます。西洋梨のような形をしており、古墳を取り巻く周壕が、南西へ付け加えられたような格好をしています。また、木棺も2ヵ所に埋設されており、特殊な古墳と言えます。

② 埋葬施設と副葬品

1号墳の南木棺から出土した土器の型式差から、次のように古墳の築造順が推定されます。第1埋葬施設は、最初の周壕に囲まれた円墳の中央に設置されました。もう一つの木棺を埋設する必要が生じた時、別の1基を造るのではなく、1号墳を拡張するように追加の周壕が掘られました。第2埋葬施設の位置も、少しずらされています(図7)。

副葬品は、鉄製の素環頭大刀や直刀、鏃、工具、金環、勾玉、丸玉、ガラス玉などです(写真12)。特に、1,784点のガラス玉は注目されます。また、土器は従来の土師器に加えて、各務原市内では最も古い段階の須恵器が副葬されていました。この古墳群は、新しい葬送儀礼や技術力をもった人たちが、当地へ移住してきたことを意味していると思われます。

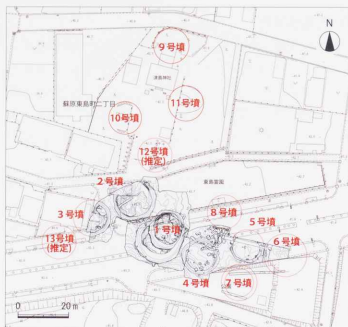


図6 熊田山北古墳群の分布図



図7 熊田山北1号墳の実測図



写真12 熊田山北1号墳の出土遺物

5. 横穴式石室の導入【西洞山6号墳】

6世紀以降、各務原市域には群集墳が一気に増加するとともに、横穴式石室が導入されます。石室は、外部とを結ぶ羨道と、棺を安置する玄室で構成されますが、いくつかの型式がありました。また、1つの石室には、複数の土蔵が追葬されました。

① 西洞山6号墳の概要

西洞山古墳群は、29基の円墳が確認されています(図8)。三井山から東へ派生した西洞山の、斜面から裾部にかけて築造されています。

昭和41年度に西洞山3~6号墳が、平成18年度に2号墳が発掘調査されました。なかでも、6号墳は最も古く位置付けられ、6世紀前半の築造と推定されています。

墳丘は二段築成で、発掘調査では下段の検出が十分ではありませんが、各段には墳丘盛土を保護するために、大きめの石を積み上げた外護列石を巡らせていました。

② 横穴式石室

新たに導入された横穴式石室の羨道と玄室の接続部は、屈曲して幅が変化します。玄室の幅が、片側へ広がる石室を「片袖式」、両側へ広がる石室を「両袖式」といいます。また、明確な変化のない「無袖式」もあります。

6号墳の石室は片袖式で、山石を丁寧に積み上げて造られています(図9)。羨道には、石室を塞ぐための閉塞石が詰め込まれていました。羨道の床面中央に敷かれた石列は、水を排水するための暗渠です。この石室は、各務原市域で最初期に導入された横穴式石室に位置付けられます。

参考までに、5号墳の石室は無袖式です。

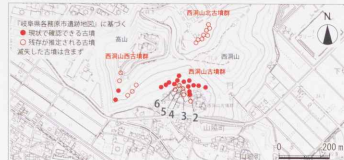


図8 西洞山古墳群の分布図

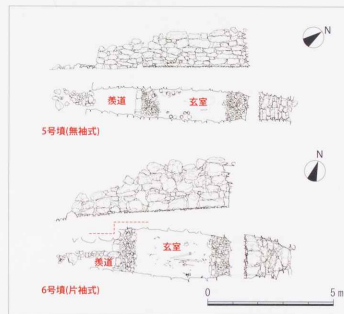


図9 5号墳と6号墳の横穴式石室実測図

③ 副葬品の変化

西洞山古墳群で出土した副葬品では、鉄製品が目立ちます。6号墳では、乗馬のための装具である馬具が副葬されていました。また、鉄鏃や大刀等の武器も出土しており、被葬者の武力的性格が窺えます(写真13)。



写真13 西洞山6号墳の出土遺物

6. 続く前方後円墳【大牧1号墳】

前方後円墳は、6世紀になると西濃や東濃地域では姿を消すといわれますが、各務原市域では小型化するものの存続します。古墳群中に、円墳に混じって1～2基の前方後円墳が認められる例の多いことから、差別化を図った特別な墳墓のようです。

① 大牧1号墳の概要

福沼大伊木町に所在する大牧古墳群は、73基の円墳と3基の前方後円墳からなります(図10)。木曾川を間近に見下ろす大牧山と、その北西側の台地面に分布しました。

昭和57年度に発掘調査が行われた大牧1号墳は、短い前方部が付属する墳長約45mの前方後円墳です(図11)。横穴式石室の仕様や規模、豪華な埋葬品から、古墳群の中でも別格であり、集団の盟主の墓と考えられます。

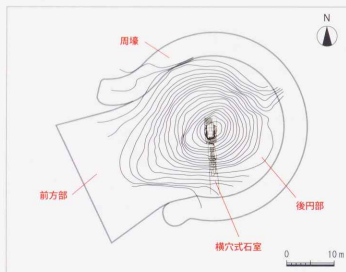


図11 大牧1号墳の実測図

② 横穴式石室と家形石棺

大牧1号墳の石室は両袖式の横穴式石室で、前庭部・羨道・玄室で構成されます(図12)。前庭部とは、石室の入り口に相当する部分で、両壁に河原石を積み上げています。羨道と玄室には、山石(チャート)を中心に、巨大な河原石(砂岩)を併用しています。

玄室には、箱状に組み合わせた本体に、屋根形の蓋をした家形石棺が安置されています(写真14)。蓋の合わせ目には、封印を意味する朱が塗られています。石棺の大きさは、長さ2.4m、幅1.2mで、美濃地方では最大級です。石材は砂質凝灰岩で、大山市の善師野で産出したものによく似ています。

石棺は、盗掘によってこじ開けられており、内部には僅かな骨片などが残るのみでしたが、外側には盗掘を免れた須恵器や馬具などの副葬品が発見されました。

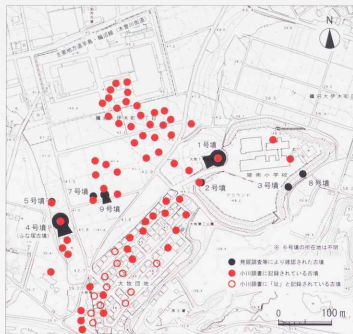


図10 大牧古墳群の分布図

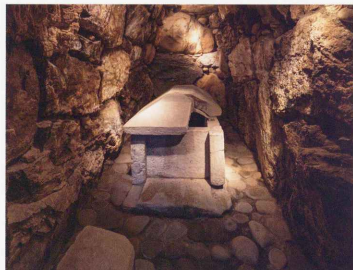


写真14 大牧1号墳の家形石棺

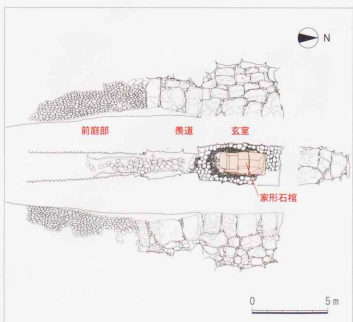


図12 大牧1号墳の石室実測図

③ 金銅装製品を含む副葬品

当時、鉄製品は貴重なものでしたが、鉄を金銅等で装飾した金銅装製品は、さらに特別です。大牧1号墳は、金銅装の馬具(写真15)や刀子などが副葬されており、前方後円墳であること、立派な石室・石棺を有することも合わせ、古墳群のなかでは別格の盟主墳であったことが証明されます。



鞍金具(前輪・後輪)

馬の背に置いて乗り手がまたがるための鞍に使われた金具です。鞍の前側と後側に飾りとして付けられました。鉄の表面を金銅で装飾しています。



透金具

革帯が交差するところに取り付けられる金具です。石室内から鉄地金銅装2点と鉄地銀象嵌2点の計4点が出土しています。



「美濃ふるさと歴史館」(福島県文化財センター・白河館提供)



透金具

透金具のうち、鞍と尾の間に付けられる装飾性の高い馬具です。模様を刻み、そこに銀をはめ込む銀象嵌という細工が施されています。



透金具

鞍を固定する革帯に付けた装飾です。心葉形といわれる楕円形をしています。鉄の表面を金銅で装飾しています。



環状鉄板付脣

馬を制御するための馬具です。馬の口に咬ませた銜を手綱に付け操ることによって、馬に乗り手の意思を伝えます。銜の両側に付く環状鉄板は、銜がはずれるのを防ぐ役割があります。石室内から3点の脣が出土しています。



鞍金具

鞍と、騎乗時に足を乗せるための鐙とを繋ぐ金具です。三連式の鎖の上部は鞍と繋ぎ、下部は鐙を繋ぐ留めていました。

写真15 大牧1号墳の出土馬具

7. 方墳の出現【鵜沼西町古墳】

前方後円墳の築造が終了する6世紀末以降、これに置き換わるように、四角い形をした方墳が出現します。依然、円墳が標準的な古墳として造られ続けるなか、方墳は新しい価値観のなかで、特別な意味を提示しているように感じられます。

1 鵜沼西町古墳の概要

各務原台地の東端部、鵜沼西町の木曾川を見渡す斜面上に造られた一辺約20mの方墳です(写真16)。集合住宅の建設に伴い、平成12年度に発掘調査が行われました。

大型の墳丘は、外護列石を巡らせた二段築成(図13)で、中央には無袖式の横穴式石室を設けています(図14)。石室石材は、俗称「鵜沼石」と呼ばれる砂岩が大半を占めます。

この古墳は、発掘調査をすまで存在が知られておらず、竹藪の中に眠っていました。

2 石室内と周壕の副葬品

石室内の副葬品は僅かでした。その理由は、鎌倉時代の初め頃に人が侵入して、別の目的に使用していたためです。古墳時代の須恵器に混じって、中世の陶器も出土しています。また、石材を割って運び出された痕跡も確認されました。

この古墳は、規模の大ききから盟主墳と考えられ、当初は相当の副葬品が納められたと思われます(写真17)。石室内に残された僅かな須恵器の型式より、7世紀前半に築造されたことが分かります。また、墳丘背面に位置する周壕からも須恵器が出土しており、7世紀後半のものが認められることから、古墳の造営は、この半世紀の間と考えられます。



写真16 鵜沼西町古墳の全景

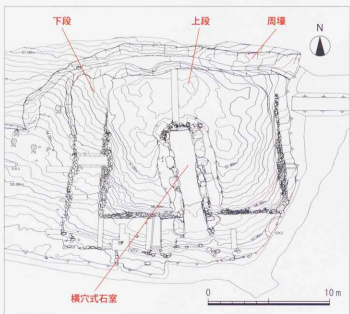


図13 鵜沼西町古墳の実測図

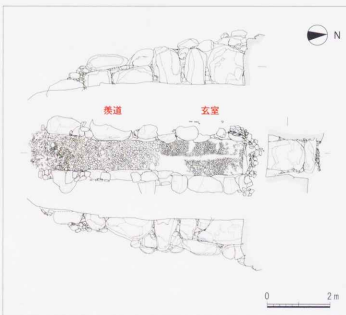


図14 鵜沼西町古墳の石室実測図



写真17 鵜沼西町古墳の出土遺物

8. 終末期の古墳【東山4・6・8号墳 / 天狗谷1・2号墳】

400年間におよぶ古墳時代も、7世紀末には終焉を迎えます。7世紀後半以降、地方でも上流階級に仏教が導入されると、古墳は造られなくなります。そして、8世紀初頭の律令国家の成立で、日本における古墳築造の文化は完全になくなりました。

1 東山4・6・8号墳の概要

東山古墳群は、蘇原持田町の東山丘陵に所在していました。東山ニュータウンの造成に伴い、昭和60年度から平成2年度にかけて発掘調査が行われました。

東山4・6・8号墳は、7世紀末から8世紀初頭にかけて造営された方墳です。墳丘の規模は一辺9.5~12.7m、石室の全長は4.8~6.4mと小型です(図15)。出土した須恵器(写真18)の型式から、3基は同時期の古墳と推定されます。



写真18 東山4・6・8号墳の出土遺物

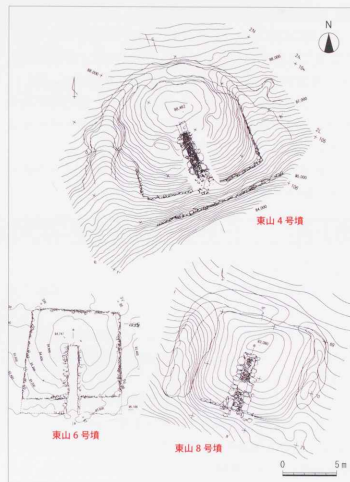


図15 東山4・6・8号墳の実測図

2 天狗谷1・2号墳の概要

天狗谷古墳群は、須衛天狗谷の丘陵斜面に造られました。昭和59年の土取り工事に伴って、1・2号墳が発掘調査されました(図16)。そのうち2号墳が、須恵器と灰陶器の窯跡と共に現地では保存公開されています。

いずれも直径約10~12mの円墳で、出土した須恵器(写真19)の年代から、7世紀後半に造られたと推定されます。この一帯は、美濃須衛古窯跡群と呼ばれる須恵器の大生産地であり、窯跡と古墳が近接していることから、須恵器工人の有力者と関係した古墳ではないかと考えられています。

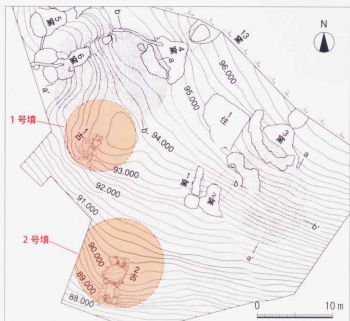


図16 天狗谷1・2号墳の実測図



写真19 天狗谷1・2号墳の出土遺物

9. 新たな時代の到来

① 壬申の乱と古代寺院の出現

7世紀の日本では、律令国家へ向けた整備が進む一方、672年に天皇家を二分する内乱「壬申の乱」が勃発します。美濃では、この戦いで村国男依らの豪族が活躍し、大いに戦功をあげました。一説によれば、この時の論功行賞により、美濃地域の豪族たちは複数の古代寺院を建立することができたと考えられます。

各務原市域では、7世紀の終わり頃から蘇原と各務原地域に古代寺院が建立されたことが分かっています。

② 置き換わっていく富と権力の象徴

寺院には、瓦や礎石を持った建築物、仏像、仏具、經典等があり、学識をもつ僧侶がいます。まさに最先端文化の象徴といえます。これまで、富と権力の象徴であった古墳に置き換わるものとして、有力支配層は仏教を積極的に導入し寺院の造営を手助けようになりました。

仏教思想の普及は、それまでの祖先崇拝の考え方に影響を与え、古墳で自己の力を誇っていた豪族の意識を変化させながら、古墳時代を終焉へと導いていきました。

10. 600基の古墳が語ること

① 古墳分布の特徴と展開

各務原市域の主要な古墳を地域・時代別に概観すると、図17のようになります。

弥生時代に蘇原の丘陵部で出現した埴丘墓は、新境川流域において水田開発を成功させた有力者の墳墓であると考えられます。

古墳時代の前期になると、さらに強大化した豪族の首長らは、ヤマト政権の傘下に入り各務原台地の東西両端(那加北西部と鶴沼中部)で対峙しつつ、平地に前方後円墳を築造して権力を誇示しました。各々の古墳は、首長の交代という系譜に沿って数を増やしました。

その後、古墳時代の後期には、小河川流域や木曾川付近の沖積低地において、水田開発が進行しました。その結果、人口は急激に増加し、古墳へ埋葬される身分階層が拡大したことも合わせ、小型の古墳が一気に増加しました。一方、各務原台地の内部に古墳が造られなかったのは、台地が農耕に向かない土地柄で、農村が成立しなかったことを意味していると思われる。

各務原市域における古墳時代の繁栄には、木曾川の河川交通や、陶器等の地場産業も関わっていると考えられます。さらに、中央のヤマト政権や有力豪族との関係を維持することで、権力が担保され、様々な益を得たり、一部の副葬品に見られるような金銅装の財を入手していたと考えられます。小型の前方後円墳が単独、あるいは群集墳の中に存在し続けたのは、そうした関係が維持されていたことを示しているのかもしれませんが。

② 里・郷の誕生へ

古代の地方自治は、国一評(郡一里(郷))と区分したことが始まりとされます。例えば、「美濃国各務郡中里」のように表記されました。平安時代になると、当時の地名辞典である『和名類聚抄』から、各務郡に芥見郷・那珂郷・三井郷・各務郷・村国郷など、現在につながる村名が既に存在していたことが分かります。

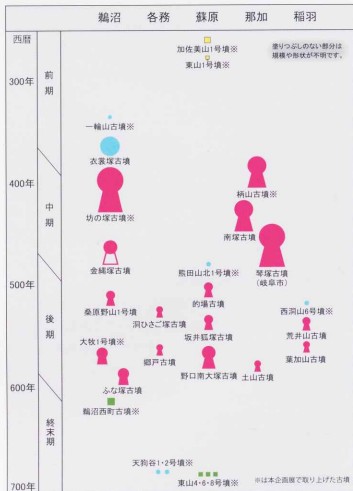


図17 主な古墳 (仮説を含む)

古墳時代の終末期に近づき、前方後円墳から置き換わるように方墳が出現したことは、一部に新しい体制を軸とする権力が芽生えた可能性があります。

群集墳の分布は非常によくまとまり、豪族集団の単位であると同時に、初期農村の単位を示していると考えられます。墓域に近接して居住域や水田・耕地があったと推定されます。各務原市域における600基の古墳は、地域の土地環境を巧みに活用し、その開発を成功に収めていく歴史の過程を、私たちに物語っています。